

グリーンな米づくり栽培暦

令和4年度版
東陸合地区有機稲作協議会

月	3						4						5						6						7						8						9					
半旬	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6	1	2	3	4	5	6						
生育ステージ							播種期	育苗期				田植期						有効分げつ終期	出穂20日前		出穂10日前	出穂期						成熟期														
作業																			センシング																							
							2回代掻き						田植		除草				追肥																							
水管理													浅水		間断灌水										間断灌水																	

土づくり

圃場の生産力の維持増進のため、稲ワラ等の全量すき込みおよび冬季に**たい肥(鶏糞等)等の施用**を行います。ただし、過剰な有機物の施用は収量、品質を不安定とさせるため、土壌診断により状態の把握に努めます。

育苗

種子消毒は**温湯消毒器**を用いて行います。60℃10分が基準です。消毒後は低温水で十分放冷した後浸種作業に入ります。ただし浸種初期の10℃以下の低温は発芽率の低下を招くことから、13℃前後での浸種を心掛けます。低温期の出芽には、加温式の育苗期の利用が有効です。

育苗

播種量は乾粳80g 条撒きが良い

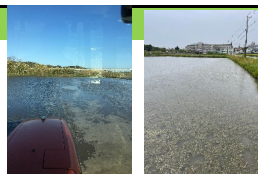
第1葉展開時から、1葉増えるごとに追加施肥1gN／箱行くと根が長持ちします。

育苗期間は一般移植よりは長く、**3.5葉～4葉で移植**します。



耕起・代かき

2回代掻き：**1回目、荒代掻き**。荒代掻き後、(最高気温－10)℃の積算が80℃でコナギ等雑草が発芽するので、**雑草発芽後に、2回目の代掻き**を行います。2回目の代掻きは水を多く入れて、代掻きを実施する前に、トラクターで8の字などに圃場内を走って、轍を水面に作ってから行くと、どこを作業したかわかりやすくなります。



施肥設計

基肥：基本的には無施肥にします。

追肥：田植後センシングを行い追肥として**くず大豆を100kg/10a**施用します。



栽植密度

初期生育が遅いため、早く分けつを確保することが重要。そのため掻き取り回数20回(条にあわせる)で**70株／坪の密植**で移植するほうが収量が安定する。

田植

4月下旬～5月上旬移植が適期です。(この期間で安定的な収量・品質が確保されます)
極端に移植時期が早いと有機質肥料の肥効が出にくくなります。なるべく、雑草をはやして、田面から除去してから移植したほうがその後の雑草発生が少なくなります。
また、移植時に、**米ぬか同時散布60kg／10a**を行うことで、有機酸を発生させて、雑草の発芽を抑制します。



除草作業

機械除草

田植後14日から7日おきに除草(3～4回程度)。基本的には雑草発生を確認してから行う。
イネ科雑草が多い場合は早めから、広葉雑草が多い場合は遅めから行う。

田面はひたひた状態で行い、乾燥条件での作業はしない。
ヒレタゴボウ、アメリカセンダングサ等の中干以降に発生の多い圃場では効果が十分でない場合がある。
また、作業性を良くするために代かき時の均平は重要です。



病虫害防除

有機栽培であるため基本的には**無防除**。

ただし近年は出穂期以降のカメムシの発生が多く登熟不良による収量低下、斑点米による品質低下につながっているため注意を要する。

また、耕種的防除として出穂期前に畦畔雑草の処理を行うこと、圃場内のイネ科雑草の抜き取りは重要です。

また、無農薬栽培になるため出来るだけ**病気に強い品種**を選ぶ。